30 子どもへの姿勢が一貫せず考え方の違いが出てしまいます。

事業のスタッフとして参加した時のことです。簡単に事前打合せはしたものの、実際に活動をする中で、子どもとの関わりかたのスタンスがスタッフ間で異なり、活動の最中に子どもたちを混乱させてしまいました。

（イベントスタッフ）

おーちゃんのヒント

子どもへの接し方はスタッフごとに違っていて当然ですし、ある程度はバラつきがあった方がむしろ自然だとは思いますが、子どもが戸惑うほど違いが大きい場合はやはり問題と言えるでしょう。

日頃からのコミュニケーション

基本的にはスタッフ間での日頃からのコミュニケーションが重要で、それぞれがどのような子ども観を持っているかを事前に把握し、あるべき対応について話し合う機会を設けることが一番効果的です。

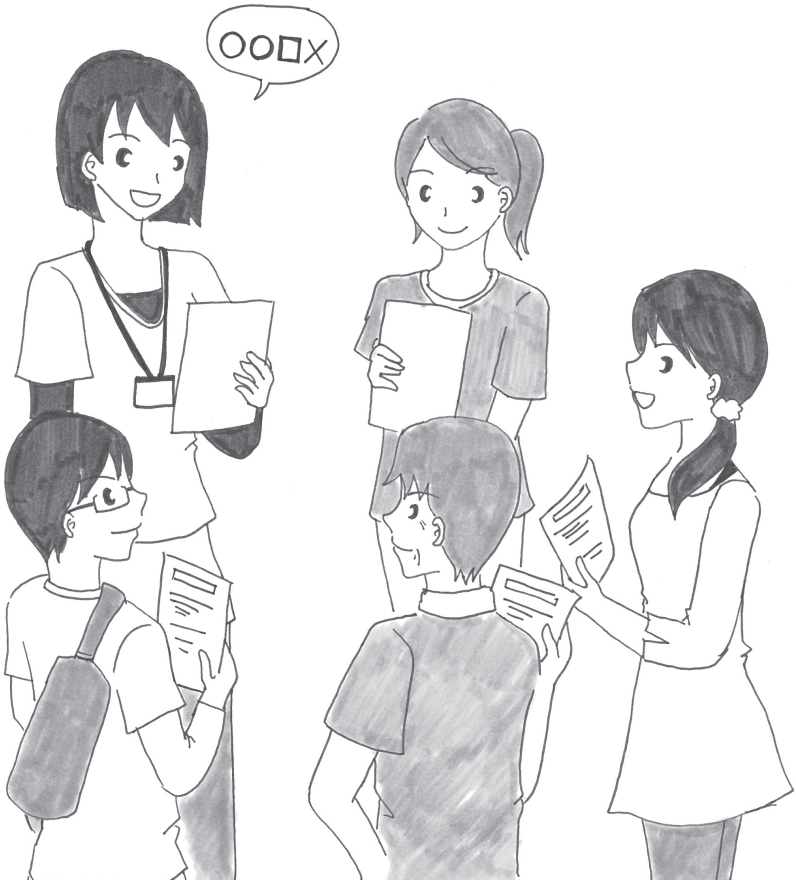
対応の仕方

また対応の仕方については、基本的には団体や場の設定に準拠することを心がけましょう。どの現場でも、子どもたちにどのように成長していって欲しいのかについて等、大まかな方針が設定されているはずです。まずそれを確認し、自分自身の子どもへの関わり方がその中でどう位置づけられるのかを考えてみることで、現場での自分の立ち位置も明確になっていくでしょう。またスタッフ間の方針の違いも、現場の方針に照らし合わせながら検討することが可能になります。これは職員同士だけでなく、ボランティアの方との関わり方の違いを考える場合等にも有効です。

議論・意思表明の大切さ

ただ、こう言うと職員は団体の方針に黙って従うものと解釈されるかもしれませんが、そうではありません。もっとこうした方が良いのではないか、こうであれば良いのに、といった議論を起こすことは、団体の一層の改善にもつながることです。そのためにも、どのように子どもと接するべきなのかをスタッフ同士で話し合い、意見を表明していく場があることは重要なのです。

31 ボランティアとして関わってくれる人が集まりません。



子ども祭りイベントを企画しましたが、人手がかかるため、地域のボランティアの助けが必要です。ボランティア募集のチラシをあちこちに配ったり、声をかけたり頑張っているのですが、なかなか集まらず困っています。

（イベントスタッフ）

おーちゃんのヒント

ボランティアが集まらない、あるいは集まっても長く続かないといった悩みは、結構多くの現場に共通のものではないかと思います。さまざまな企画・事業に不可欠なボランティアスタッフですが、ボランティアを集めようとする際に、ボランティアとして来てくれる人が何を求めているのかについて、考えてみてはどうでしょうか。

例えば大学生年代の場合、本人が面白いと思わなければ集まらず、集まっても連絡が滞りがちになる、なんてこともよくありますが、本人が面白いと感じてくれた場合はこちらが驚くほど積極的に関わってくれたりもします。「子どものために」といったように活動の意義を強調するだけでなく、ボランティアを集める場合には一度ボランティア目線に立って、何が求められているのか、どういった点で面白いと思ってくれているのかを考えてみると良いのではないでしょうか。特に初めて参加する際の印象は大事で、そこで面白いと思ってもらえればその後も繰り返し参加してもらえる可能性が高くなります。

どういった点がボランティアにとって面白いと思えるのかは事例ごとに異なりますが、一般的にボランティアに面白いと思ってもらえるようにするためには、ボランティアが子どもと馴染むことができるようにサポートすることや、ボランティアの裁量の大きさ等が関わってきます。言われた通りに機械的に動くだけではつまらないのは誰でも同じなので、ボランティアの人たちがのびのびと活動できるよう環境を整えるようにしてみましょう。

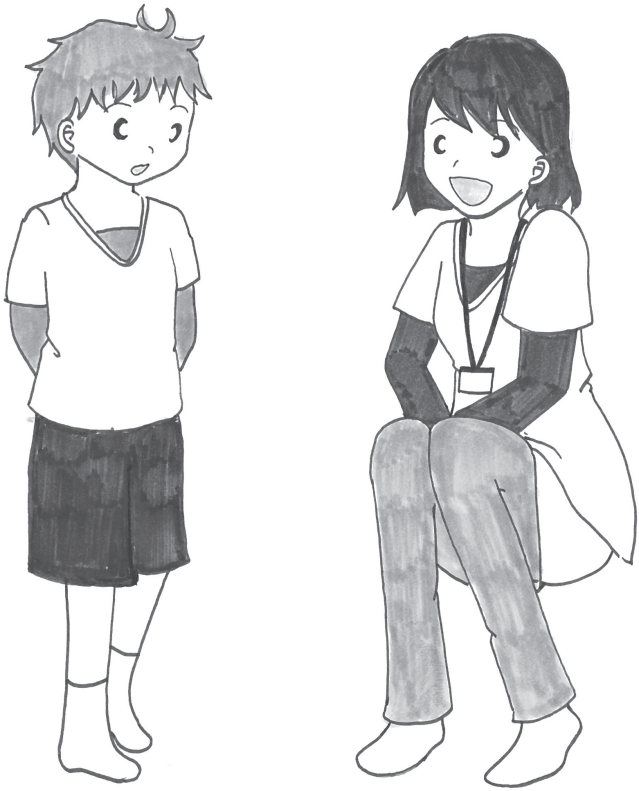
コラム　「面白い」のとらえ方　　ももっち

「面白い」とは、単にその場で生まれる楽しみや面白さだけをいうのではありません。例えば、子どもとの関係の中で生まれる成長や感動などを実感できること、自分の存在が相手から認められている・必要とされているということを実感できることなどがあります。

また子どもとの活動を通して新しい自分を発見できることや、自分で考えたことが形になることの満足感などもあるでしょう。

面白いと感じる部分は人それぞれ違っていると思います。そのような、人との関わりの中から生まれるさまざまな感情を体験できるところが、ボランティアの活動の中にあるのではないでしょうか。

32 子どもに対しうまく物事を伝えることができません。



活動に集中できず困っている子どもに話をするのですが、どうしても長々と話してしまい、こちらの思いがなかなか伝わりません。子どもと話をする時には、いつも構えてしまいます。どうすれば良いのでしょうか。

（ボランティアスタッフ）

おーちゃんのヒント

子どもとの話し方は場面や立場によって変わるものであり、どういった立場から何を伝えようとしているのかが重要になります。ただ、一般論として子ども目線に立って伝えようとすることの重要性は指摘できると思います。

ここで「子ども目線」というのは、子どものノリやテンションに合わせて話をする、ということではありません。子どもに限らず人間誰しも、人から言われた内容を自分なりに解釈し、理解しようとしています。だから、子どもに何かを伝えようとする際には、姿勢や語調等にも気を配り、子どもたちがどういった受け止め方をしているのかを確認しながら話をする必要があるでしょう。

具体的な話になると個人差も大きいのですが、基本的にはこちらが真剣に話をしていることが子どもたちに伝わるよう、相手の正面から目を見て話し、また目線を同じ高さにして話す等が効果的です。時には注意・叱責をしなければならないこともありますが、その場合でも一方的に言い募るのではなく、一つの人格を持つ存在としての子どもと向き合っていることを意識してください。また、話の要点をしっかりまとめておくことも重要ですが、何よりも真剣に向き合おうとしている姿勢がしっかりと伝われば、子どももこちらに向き合ってくれるはずです。

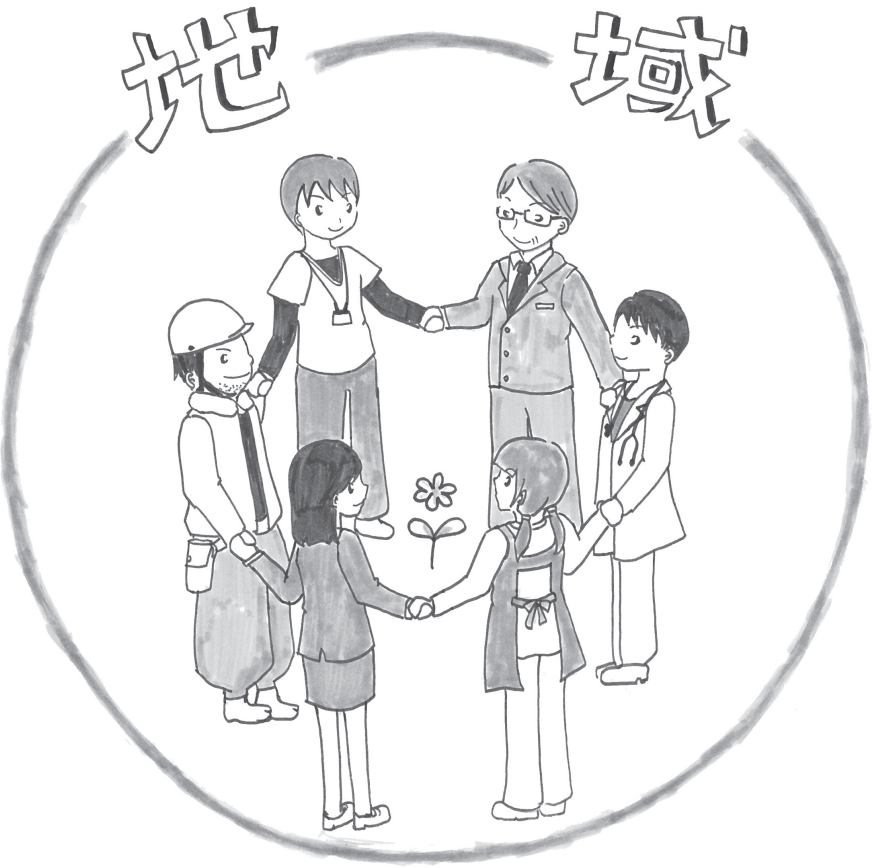
コラム　ピンチはチャンス

ももっち

子どもが問題行動を起こすと、大人としては困ってしまいます。しかし、実は、子ども自身も困っているのです。問題行動は子どもの思いを知るためのチャンスと捉え、子どもが発信したことに注目し、その時の子どもの状況、前後に起こった出来事（前日友だちとケンカしてむしゃくしゃしていた、朝出かける時
にも思いを寄せて、子どもの言い分に耳を傾けてみてください。

子どもの様子をよく観察しその気持ちを（「イライラしちゃったんだね」「苦しかったんだね」のように）一度大人が受け取ることで、子どもも自分の存在を認めてもらえたと感じることができます。そのうえで問題行動にふれて「では、どうすれば良いのだろう？」と、一緒に考えるようにすることで、子どもが自ら気づき、行動が落ち着いてくることがあるようです。一方的に叱らず、子どもの人格を尊重し、その行動に隠されている子どもの思いに注目してみることもピンチをチャンスに変えるヒントです。

33 他機関・地域と連携・協力する必要はありますか。



事業を担当しているのですが、地域のある団体から連携しようと声をかけられました。ちょっと面倒です。自分たちの団体だけでもできるのですが、地域との連携って必要なことなのでしょうか？

（イベント企画スタッフ）

おーちゃんのヒント

一つの団体で実施しているプログラムを成功させることが目的なのであれば、他の機関と協働※する必要はないのかもしれません。しかし、そうしたプログラムを通して子どもたちの成長・発達に寄与することを意図して活動してくださっているのであれば、やはりさまざまなレベルでの協働は不可欠であると思います。その意味で、地域との関係構築は子どもの成長・発達観に関わる課題であり、どちらかというと現場で直接子どもと触れ合うスタッフよりも、マネージャー的立場の方にとって重要な項目と言えるかもしれません。

子どもは一つの場だけで成長していくのではなく、地域のさまざまなところに顔を出し、多くの人と関わりながら大きくなっていきます。その際、子どもはその時いる場所に応じてさまざまな顔を見せますが、例えばキャンプ等の活動の際に見る子どもの様子が、学校での様子とまるで違うことなどよくあります。子どもたちの成長・発達を見通すためには、こうしたさまざまな場での様子を踏まえながらどのように関わっていくかが問われることになるのです。

また、子どもと関わっていく中で直面するさまざまなトラブルについても、その多くが他機関・地域との連携による対応を必要としています。子どもに関わるさまざまな人がネットワークを構築し、各種情報の共有や意見交換を重ねながら、子どもを見守る体制を整えていくことが求められています。

※協働：立場は違っても同じ目的を持つもの同士が対等に意見交換して行動を共にすること。

コラム　学校などとの連携　　ももっち

県内の公立小・中学校では、学校支援ボランティア制度が導入されています。また、公立小・中・高校の中には「学校支援地域コーディネーター」が活躍している学校もあります。地域の方々による学校支援地域コーディネーターや、窓口となる担当教員が配置されている場合には、その担当者に具体的に企画や事業、交流内容などを理解してもらい、無理なくできることから連携を始められると糸口が見えてきます。

まずは日常の活動や、行事など、参加できる場を探して、その場に赴き情報交換を行い、徐々に相手が必要としていることをリサーチしてみてはどうでしょう。多忙な相手には活動内容をわかりやすくまとめて伝えどんな形での協力が可能かをこちらから提案してみるのも一つの方法です。

（参考）神奈川県教育委員会ホームページ「学校支援ボランティア」

34 地域へのアプローチの仕方がわかりません。

地域と連携していくことには、意味があるとは思うのですが、具体的にどういう連携のしかたがありますか？また、やってみようと思ったけれど、どうすれば良いのでしょうか？

（イベント企画スタッフ）

おーちゃんのヒント

地域にどういった団体があるか、また子どもたちの置かれている状況について認識されているかは、地域ごとの差が非常に大きいと思います。ただ、自治会や商店組合といった、地域の人たちの集まりがあるようなら、まずは一度話をする機会を設けてみてはいかがでしょうか。地域住民の間で子どもたちがどのように認識されているのかを把握するだけでも、その後の関わり方に大きなプラスとなるはずです。

その際、あまり具体的に話し合いのテーマを設定しなくても構いません。むしろ先方の会議の場に入り込んでしまうくらいでも大丈夫で、大事なことは腹を割って語ってもらえる環境を作ることです。また、その際には地域にとって子どもと関わることがどういった意味を持つことなのか、相手がどのように考えているのかを理解しようとしてみてください。よくある話として、「子どものために」と地域に協力をしてもらっていると、地域側が疲弊してしまい長続きしないことがあります。また子どもたちが地域振興などの地域側の目的のために位置づけられてしまうことも多いです。

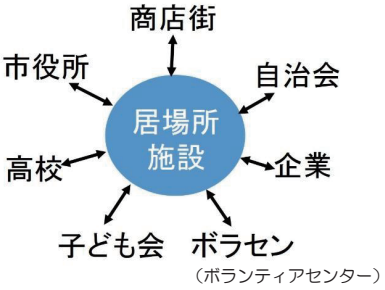
子どものために地域を使うのではなく、また地域の振興などのために子どもを位置づけるのでもなく、双方の意図を調整しながら長く続く関係性を構築していく、コーディネーターとしての役割が必要になってきています。いきなりそれぞれの意見の調整と言われても難しいとは思いますが、まずは地域側がどういった認識を持っているのか、じっくり聞いてみるところから始めることをお勧めします。

コラム　ステークホルダーマップ

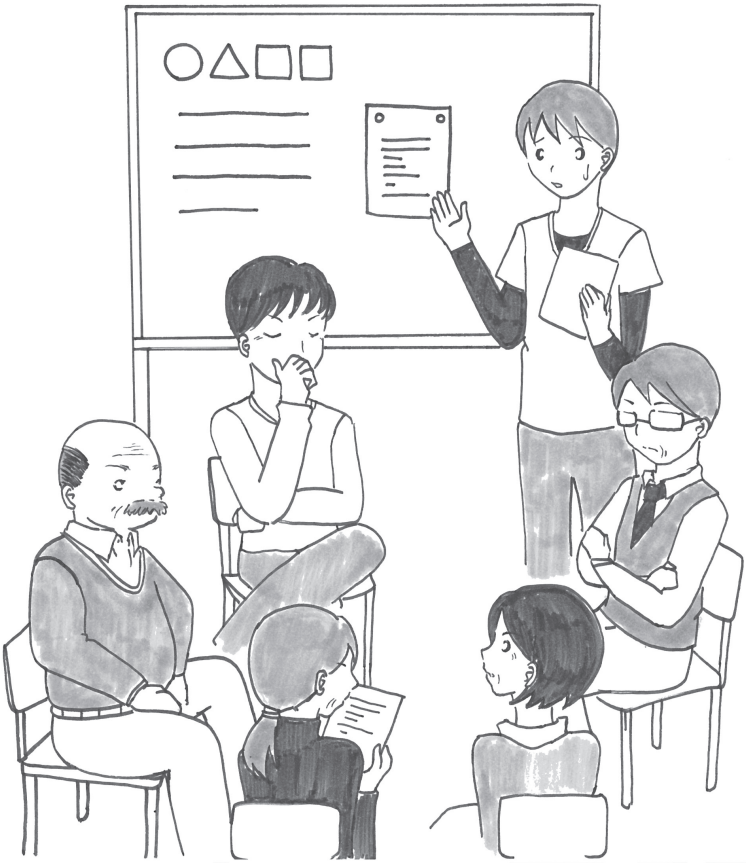
シンプソン

地域の団体との関係を考える際に、まずは関係のありそうな団体をどんどん挙げてみて、それを図にしてみるという方法があります。こうした図をステークホルダーマップと呼びます。ステークホルダーとは「利害関係者」というような意味で、どんな団体とどんな関係を持ったら良いかを考える手がかりとなります。

できればどちらかが一方的に負担をかけるのではなく、双方にとって価値のある協働ができれば、その関係を長く続けることができるでしょう。



35 会議等の話し合いの場で意見が出てきません。



話し合いの場で、シーンとした雰囲気になってしまって、なかなか会話が弾んでいかないことがあります。進行役としても、また、参加者の立場としても、活発な会議にするためにはどうすれば良いのでしょうか。

（イベント企画スタッフ）

おーちゃんのヒント

話し合いの場で誰も発言せず、静かになってしまうことがあります。理由はいくつか考えられますが、多くの場合何となく口火を切るのがためらわれる雰囲気になっていたり、そもそも何を言えば良いのかわからなくなっていたりすることが多いように思われます。

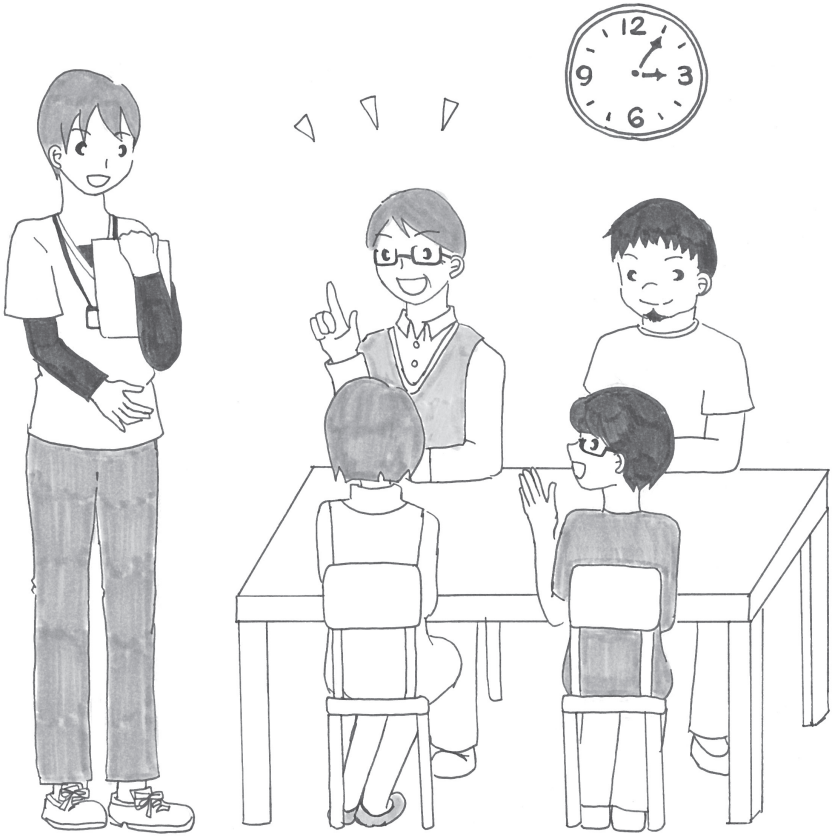
そういった場合、重要なのは論点を絞って明確にすることです。「～についてどう思いますか」といった漠然とした聞き方ではなく、自分なりの整理で構わないので論点を出し、具体的なイメージがしやすい形で話題にすると、次の人も意見を言いやすくなります。また特定の話題について意見を聞きたい人が居る場合は、名指しで意見を求めることも効果的です。場合によっては参加者全員に一言ずつ意見をもらうようにしても良いでしょう。司会の役割に就いている場合は特にそうですが、そうでなかったとしても一参加者として議論が活性化するよう働きかけてみてください。

少し違う場合として、参加者同士の意見の対立が表面化しており、お互いに牽制しあうことで沈黙が生じている場合もあります。こういった場合は、個々の話題で議論をしても解決しない場合が多いため、まず相違点の根幹がどこにあるのかについて意見をもらい、折り合うことができるポイントを探す方が建設的だったりします。それぞれの参加者が、何を背負って話し合いに参加しているのか、どこからは譲ることができないのかを、見極めることが重要です。

【会議で使える手法】　　（参考）「平成 15 年度会議・話し合いガイド」（P. 84 参照）

①ブレーンストーミング	何人かが特定のテーマについてアイディアを出し合う「集団的発想法」です。奔放な発想を歓迎し、どんな意見も批判しないことが大切です。アイディアの数が勝負で、出てきたアイディアを結合、改善、発展させます。参加者の創造性が開発されたり、チームワークが強化されたりという効果があります。
②バズセッション	グループごとに①を実施し、その結果を全体会議に持ち寄る方法です。６人程度が標準ですが、人数の都合により調節します。グループ討論の時間も６分が標準ですが、20 分 30 分必要な場合も多いです。大人数でも自由で活発な討議ができ、グループの中では密度の高い討議ができます。また、グループの討議と全体会議を効果的に組み合わせることにより全体の整合性や統一が図れるという効果もあります。
③ＫＪ法	メモまたは付せんを利用したアイディア出しです。カードを使うので参加者全員が気負うことなく参加でき、まとめも視覚的でわかりやすい方法です。さまざまなアイディアや意見、情報を１枚ずつ小さなカードや付せんに書き込みます。次にそれらのカードの中から類似するものをグループ化し図解してアイディアをまとめます。

36 話し合いの際の司会進行のやり方がわかりません。



司会をしていると、いつも時間切れになりがちで、結論を急ぎ誘導するような形になってしまいあせります。また、活発な意見を引き出しながら進めたいと思いますが、話が弾むと脱線してしまったりして、会議の進行は苦手です。

（イベント企画スタッフ）

おーちゃんのヒント

話し合いにもさまざまなものがあり、結論をどのように持っていくかによって司会のやり方も少しずつ変わりますが、基本的には参加者の意見を引き出し、参加者間の合意形成を目指すことが主な役割となるでしょう。

進行を担当する際に重要なことの一つは、いかに参加者が意見を言いやすい環境を整えるかですが、これについては前項(P.74)で、ある程度言及しているのでここでは割愛します。進行をする際にもう一つ重要になるのが、既定の時間内に議論に一定の結論を出すための、全体への目配りです。例えば終了時間から逆算して進行を行うことや、話し合いのテーマから逸れた話題となった時に元の議題に引き戻すことで、時間内に一定の成果を出せるよう話し合いの内容をコントロールすることが求められます。話し合いのルールを確認し、議論の内容を整理しやすいようにすることも有効でしょう。またそのためには、議論の様子を見ながらどういった結論になりそうかをイメージし、残り時間を使ってそこに至るまでの道筋ができるよう議論を先導していくことが必要になります。

ただし、これもよくあることではありますが、司会がイメージした結論に議論を誘導したり、イメージにそぐわない発言を安易に切り捨てたりするようなことはあってはなりません。進行のイメージにこだわり過ぎず、一人ひとりの発言者の意図がどこにあるのかをしっかり考えながら、適宜軌道修正をしていってください。

コラム　話し合いでこんなこと、あんなこと

ももっち

会議の時に何が言いたいのかわからない意見を言う人がいます。そんな時は、「それは〇〇〇ということですか？」と言いなおして確認しながら進めると参加者全体の理解も進み、会議の効率アップにつながります。

また、議題を絞っていく時などには、「ざっくりまとめて言うと、〇〇･･･こういうことですよね！？」と言葉にして問い直します。会議の場で、司会者がこのように進められるとベストですが、なかなか難しいものです。うまくいかないこともあるので、参加者が応援の発言をして助け合い、全員で話しやすい会議を作れると良いと思います。その和やかな雰囲気が会議においてお互いの信頼感や安心感を生み出し、ひいてはそれが、良いアイディア創りや活発な会議につながっていきます。もしできれば、普段からコミュニケーションが取れている人を、話し合いのメンバーに仕込んでおくと都合が良いです。気心が知れているので、話が停滞した時や、ここで場を活性化させる意見を言って欲しいという時に「〇〇さんどうですか？」と振ると話し合いが進みます。

37 話し合いの場で自分の意見をうまく伝えることができません。

会議になると、話したいことは頭に浮かんでくるのですが、それらがなかなかまとまらず、言いたいことの半分も伝えられないということがよくあります。うまく伝えるコツはありますか？

（イベントボランティアスタッフ）

おーちゃんのヒント

人前で話す時にうまくまとめて話すことができず、長々と話した上に結局伝わらなかった、という経験がある方も多いのではないでしょうか。

話す内容を考える際にまず意識をしなければならないのは、話し合いの主題が何かということです。思いついたことをそのまま話していると、話し合いの主題から逸れてしまい、伝わらないだけでなく話し合いの場を混乱させてしまうこともあり得ます。そうならないために、その場が何について話す場であるかを認識し、その主題に沿った意見を出すよう心掛ける必要があります。また、その主題に対して自分は何を言いたいのか、それまでの議論にどういった形で関与したいのか、例えば賛成なのか反対なのかといった簡単なまとめだけでも先にしておくと、自分自身の話し合いの中の立ち位置がわかりやすくなるはずです。

とはいえ、自分の意見をまとめるのはなかなか大変で、例えば自身の関わっている現場のエピソードが浮かび、それまでの話と関連するはずだけれどうまくまとめられない、ということもあるかと思います。そういった場合には、それを素直に伝えてしまいましょう。無理にまとめようとするよりも、関連すると思われる事例として紹介するにとどめた方が、他の参加者のイメージを膨らませることにもつながりますし、うまく取りまとめてくれる人がいるかもしれません。他の人と協力しながら、言葉にならなかった自分の思いを整理していっても大丈夫ですし、そうしたやり取りが自分自身の話をまとめる力を向上させることにつながります。

【会議の進め方に関する参考文献】

『生涯学習支援のための参加型学習のすすめ方～「参加」から「参画」へ～』
　　廣瀬隆人・澤田実・林義樹・小野三津子著　ぎょうせい
『発想法ー創造的開発のためにー』川喜田二郎著　中公新書
『続・発想法ーＫＪ法の展開と応用ー』川喜田二郎著　中公新書
『参加型ワークショップ入門』ロバート・チェンバース著　明石書店
『ファシリテーション革命』中野民夫著　岩波アクティブ新書
『会議の技法ーチームワークがひらく発想の新次元』吉田新一郎著　中公新書
『ミーティング・ファシリテーション入門』青木将幸著　ハンズオン！埼玉出版部
『ファシリテーション・グラフィックー議論を「見える化」する技法』
　　堀公俊・加藤彰著　日本経済新聞出版社
『Graphic Recorderー議論を可視化するグラフィックレコーディングの教科書』
　　清水淳子著　ビー・エヌ・エヌ新社
『ワールド・カフェ～カフェ的会話が未来を創る～』アニータ ブラウン他著　ヒューマンバリュー
『ワールド・カフェをやろう　新版　会話がつながり、世界がつながる』
　　香取一昭・大川恒著　日本経済新聞出版社

38 相手に主体性を持ってもらうためにはどう関われば良いでしょうか。

プログラムへの関わり方として、積極的に関わることで活動に充実感がもてるのではないかと思いますが、最近、スタッフからの指示待ち状態の子どもやボランティアさんが多いように感じます。主体的に関わってもらうためにはどうすれば良いのでしょうか。

（施設事業スタッフ）

おーちゃんのヒント

子どもはもちろんですが、ボランティアや地域の方などの関わってくれる大人にも主体的に取り組んでもらうことが、活動の活性化や継続性の確保につながります。

主体的に動いてもらえるよう働きかける際に重要になるのは、相手の意見の実現可能性に対する意識です。単純に言ってしまえば、意見や要望を出した時に、それが実現する可能性があると思ってもらえていれば、主体的に意見を出してもらうことができるようになります。逆にプログラムがしっかり決まりすぎていたり、ボランティアさんに、言われたことをこなすことを求めすぎたりしていると、主体的に関わってもらうことは難しくなるでしょう。

実際には安全面の問題などからよせられた意見を実現させるのは難しい場合も多いかと思いますが、その際にも相手が何を求めているのかをよく聞き取り、やりたいことが実現可能な形式はないのかを一緒に考えるなど、しっかり向き合っている姿勢を示すことができれば、意見を出すことに躊躇することはなくなるはずです。

基本的には自由で主体的な取り組みは、相互の信頼関係の上に成り立つものです。年齢を問わず相手が一人の人間であることを認め、真摯に向き合う姿勢を示すことこそ、最も重要なことではないでしょうか。

コラム　大人にできること

ももっち

昔は子どもたちが中心的な役割を担う地域の活動（伝統行事・伝統芸能）が、広く普通に行われていました。子どもたちは、それらの体験を通して人との関わりや主体的に行動することなどを学び、成長していきました。しかし、子どもの教育が学校教育に任されるようになり、地域の教育力が衰弱するとともに学校教育にも限界があることが明らかになってきました。そこであらためて学校と地域の協力が必要になってきたのです。今必要とされているのは、日常生活のさまざまな体験の中で、失敗を重ねながら学んでいくという機会を持てるように、地域の暮らしなどに子どもたちが中心となって活動する機会を用意することです。

私たち大人に求められているのはそのための条件をつくり、子どもたちの活動を支援する役割です。そしてその中で、子どもたちが主体的に動けるようになるためには、子どもが自分の力を試せる機会をつくることと、大人はお節介を焼くのではなく、ゆったりと構えて待つことが大切です。何でも思ったようにやって良いと言っておきながら、いざとなるとあれはダメ、これはダメと言っていては大人への不信感を高めるだけです。活動が壁に突き当たった時には子どもたちと一緒に知恵を出し合い、その壁を乗り越える工夫を続ければ良いのです。